

第2回オートキャンプシンポジウム

# 21世紀におけるオートキャンプ場

—— オートキャンプ・ルネッサンスはキャンプ場から ——

社団法人 日本オート・キャンプ協会

## 開 催 趣 旨

社団法人日本オート・キャンプ協会は、2005年3月F I C C（国際キャンピング&キャラバニング連盟）のラルス・ダールベルグ会長を招き、国際シンポジウム「オートキャンプの未来と環境」を開催し、21世紀におけるオートキャンプのあるべき姿を<環境><観光><アウトドア>の視点から論じました。

その成果を踏まえ、今回のシンポジウムでは特に<オートキャンプ場>という視点からオートキャンプにアプローチしたいと思います。今日オートキャンプは国民的レジャーとして成長し、ひとつの産業を形成するまでに至っておりますが、その中核をなすのは全国に約1,300カ所存在するオートキャンプ場です。現在、オートキャンプ場は環境、教育、家族、余暇など現代の焦眉のテーマについて、社会に向けてメッセージを発信する場ともなっています。折りしも21世紀の国策として長期家族旅行の推進が図られていますが、オートキャンプ場はそのための絶好のインフラストラクチャーと言えるでしょう。

他方、長引く景気低迷およびレジャーマインドの低下のあおりを受けて、オートキャンプ場は利用客の減少、利益の上がっているキャンプ場とそうでないキャンプ場の二極化、さらにはキャンプ場の閉鎖といった事態に直面しています。

このような状況のもとでオートキャンプ場の現状と課題を再確認し、21世紀におけるオートキャンプの発展の可能性を探るために、社団法人日本オート・キャンプ協会は、全国有数のオートキャンプ場支配人をパネリストに招き、「21世紀におけるオートキャンプ場ーオートキャンプ・ルネッサンスはキャンプ場からー」をテーマにオートキャンプシンポジウムを開催するものです。

パネルディスカッションでは、コーディネーターを師岡文男氏がつとめ、パネリストとしてオートキャンプ場から田代嘉宏（羽鳥湖高原レジーナの森取締役）、福嶋明美（北軽井沢スイートグラス専務取締役）、鷹野好男（青川峡キャンピングパーク・エグゼグティブマネージャー）の各氏、ジャーナリストとして沖田雅生氏（月刊ガルヴィ編集長）が、「オートキャンプは環境に優しいか」、「オートキャンプは子育てに役立つか」、「オートキャンプを10倍楽しむ方法」、「オートキャンプに未来はあるか」などのテーマで語ります。

このシンポジウムがオートキャンプ場経営者をはじめ、広くオートキャンプ愛好者、オートキャンプ業界、アウトドアレジャーおよびマスコミ関係の皆様に貴重な刺激と有益な示唆をもたらすことを期待してやみません。

第2回オートキャンプ・シンポジウム実行委員会  
委員長 明 瀬 一 裕

## シンポジウム

日 時 2006年5月30日(火曜日) 16時00～17時30  
会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター 401号室  
主 催 社団法人日本オート・キャンプ協会(JAC)  
主 管 第2回オートキャンプ・シンポジウム実行委員会  
後 援 国土交通省

### プログラム

15:30 開場  
16:00 開会挨拶 長谷川 純三(JAC会長)  
16:10 パネルディスカッション  
コーディネーター 師岡 文男(上智大学教授)  
パネリスト 田代 嘉宏(羽鳥湖高原レジーナの森取締役)  
福嶋 明美(北軽井沢スウィートグラス専務取締役)  
鷹野 好男(青川峡キャンピングパーク・エグゼグティブマネージャー)  
沖田 雅生(月刊ガルヴィ編集長)  
17:00 質疑応答  
17:30 閉会

### 懇親会

時 間 18時00～20時00  
場 所 レストラン「さくら」(D棟9階)

## プロフィール

### ◆師岡文男（もろおか ふみお）

1954年東京都生まれ。筑波大学大学院体育研究科（野外教育学専修）修了後、上智大学保健体育研究室助手、講師、助教授を経て、2000年より教授。全学共通選択必修科目「野外活動の理論と実践」を担当。1986-87年イリノイ大学レジャー研究学科客員講師。1987年国際キャンプ連盟（ICF）設立に参画し、1991年より日本キャンプ協会国際交流専門委員、キャンプ・アカデミー2回生、キャンプディレクター1級。1999年より日本オート・キャンプ協会理事、2004年よりは指導者資格認定委員長も務めている。2000年には第5回国際キャンプ会議を日本に招致、組織委員会事務局長とICF運営委員を務めた。

2004年にはアジア・キャンプ連盟（ACF）の設立を実現させ、初代事務局長に選出された。『子どもとキャンピング』（ぎょうせい）他著書23冊。

詳しい履歴は、[www.info.sophia.ac.jp/taiiku/moro-rireki.htm](http://www.info.sophia.ac.jp/taiiku/moro-rireki.htm)

### ◆田代 嘉宏（たしろ よしひろ）

出身地：福島県岩瀬郡天栄村

生年月日：1960年9月10日

最終学歴：駒澤大学経営学部卒

職歴：1983年須賀川信用金庫入庫

1996年羽鳥湖高原レジーナの森(株)入社、総務経理部長・総支配人を経て

2001年に同社取締役となり、現在に至る

2003年から日本オートキャンプ協会理事となる

2005年からオートキャンプ場協議会副議長

### ◆福嶋 明美（ふくしま あけみ）

1975年 上智大学文学部卒業

1975年～77年 京浜女子大学横浜高等学校教諭

1977年 結婚を機に千葉市在住

1990年 群馬県北軽井沢に夫・子供2人と共に移住

1994年秋 北軽井沢スウィートグラス オープン

1997年 第2回アジア・パシフィックオートキャンプ大会会場となる

2005年 (社)日本オート・キャンプ協会理事就任

#### ◆鷹野 好男 (たかの よしお)

- 1970年7月 東京都板橋区で八百屋の長男として生まれる。
- 1999年4月 北軽井沢 照月湖モビレージ管理人見習として働く。
- 1999年7月 浅間観光株式会社（日刊工業新聞社系列）入社。北軽井沢照月湖モビレージ管理人として着任。レイクサイド：150区画、バンガロー12棟、リバーサイド：52区画、デイキャンプ15区画を一人で管理を行う。季節的バイトに助けられる。キャンプ場内や周辺の自然を使った山菜採りやホテル鑑賞きのこ採り、リース作りなどのイベントを小規模で展開し、個人客が定着する。学校団体のキャンプファイヤーや飯盒炊爨などの利用客も増え、続けていた低迷を少しずつ回復させる事に成功する。
- 2002年4月 三重県北勢町（現いなべ市）臨時職員として青川峡キャンピングパーク開設準備室に着任。運営方法、営業戦略、人材雇用、法人手続き等を行う。
- 2003年2月 財団法人ほくせいふれあい財団支配人に就任
- 2003年4月 自然体感型アウトドアスペース青川峡キャンピングパーク支配人に就任。オートキャンプ53区画、コテージ10棟、バーベキュー施設160席、炭焼窯2基、職員3名、パート・アルバイト18名の総括を行う。子供連れやビギナーが安心してキャンプのできる場所の提供を心掛け、お客様はゲストとして、従業員はキャストに徹する高級感と異空間を演出し、初年度より多くのハードリピーターを獲得する事ができた。
- 2005年6月 日本オート・キャンプ協会理事に就任。
- 2006年4月 青川峡キャンピングパーク エグゼグティブマネージャーに就任。  
独立のため退職し、経営アドバイザーとしてキャンプ場に関わる。

#### ◆沖田 雅生 (おきた まさお)

1965年埼玉県生まれ。

小学校から大学にかけてボーイスカウトに所属し、アウトドア活動に触れる。大学在学中は南アジアの文化人類学を専攻し、フィールド研究の名の下にバックパックの旅を楽しむ。実業之日本社では、教育関連図書、一般書、旅行ガイドブックの編集を経て2002年2月に月刊ガルヴィ編集部へ異動。同年6月より月刊ガルヴィ編集部編集長。

# 発言要旨

## 田代 嘉宏

オートキャンプ場の経営環境は、年々厳しさを増している。宿泊業としてみれば 20% 足らずの稼働率でどう利益を上げるのか、少子高齢化が進む中で相変わらずファミリーキャンパーが中心でGWや夏休みや3連休でしか満杯にならない。ファミリーキャンパーがオートキャンプのターゲットであれば年間 770 万人といわれる利用者を各キャンプ場は、争奪戦を繰り広げなければならぬ。

オートキャンプに未来はあるのかの問いかけに、施設側から見ると市場の拡大は望めないが、これから 10 年間で自然淘汰される。厳しい財政事情の中で運営されている公営・三セクのオートキャンプ場は、特に苦しいものになると思われる。新規投資あるいは修繕等が適切に行われなければ、生き残りは図れない。民営といえども、他社との差別化や新規顧客の創造を行わなければ敗者と化してしまう。

### オートキャンプに対する私見

環境・・・オートキャンプは環境にやさしいか

⇒やさしいとは思わないが、他の宿泊の手段と比べればどちらかというところやさしい。

教育・・・オートキャンプは子育てに役立つか

⇒とっても役立つ。しかし、キャンプも自己責任で行うことが肝要だ

日常生活では養えない非日常の体験を通して自然のやさしさや厳しさを体感することが大事。施設側は、管理された安全な自然の提供を心がけるが、それでも日常生活の中と比較するとワイルドさが全く違う。虫が居るのは当たり前。蛇も蜂も当然自然の中には、生息しているのである。

余暇・・・オートキャンプを 10 倍楽しむ方法

⇒基本的なマナーを守れば、自分流のキャンプ手法で問題ない。キャンプをするときにテーマを持ってキャンプすればもっと違った楽しみ方が出来るのではないか。たとえば、今回はツーバーナーやランタンなどの燃焼器具を使わないで炭や薪だけで調理や明り取りをすとか、食材は、地元の農家や漁師さんから直接分けてもらって調達すとか、向こう 3 軒両隣のキャンパーとお友達になるとか、いろいろテーマはある。

展望・・・オートキャンプに未来はあるか

⇒発言要旨の通り。

福嶋 明美

### オートキャンプ場をはじめたきっかけ

1990年春、30代後半で浅間山の麓、北軽井沢に移り住みました。都会育ちの私にとり、北軽井沢はまさに『感動の大地』でした。日本は四季が美しい国と良くいわれますが、北軽井沢は春夏秋冬の四季ではくくりきれない八季、十二季の折々の美しさを実感できる所でした。日々新鮮な感動があり、自然の懐の深さを味わうことが出来ました。この感動を一人でも多くの人と共有したい。この思いを味わってほしい。これがキャンプ場を作った出発点です。

「五感で味わう自然」「人と人・人と自然のつながりを大切に」「既成概念にとらわれない楽しいアウトドア体験」を中軸にスウィートグラスを運営してきました。

バブル崩壊後の10年余り。地方でのキャンプ場経営も長引く景気低迷の余波で苦しい経営実態であります。都市部では景気回復のきざしが見られるようですが、日本の経済はその建て直しのために多くのものを犠牲にしてきたように感じます。

リストラ、厳しくなる職場環境のなかで、十数年前には感じられないようなストレスを都会生活のなかで感じて暮らしている人々に、雄大な居心地のよい自然の中で、自分を取り戻したり、家族関係を見直したりできる場を提供できるのがキャンプ場ではないかと思えます。

今回のシンポジウムのテーマの一つに「オートキャンプは子育てに役立つか」とありますが、自信をもって「役立つ」と答えられます。子供の遊び場も失われつつある子供たちにとって、草の上で寝転がったり、冷たい川に入って魚を取ったりする行為は実体験です。自然は懐が深い。その中に子供を置くとき、子供は当たり前前転べば痛い、水は冷たい、夜は暗いということを知ります。そして伸び伸びとします。また自然の中では、家族は協力しあわなければなりません。失われつつある家族の絆、キャンプに来たときだけでもお互いがお互いを必要としあう関係が生まれます。

「オートキャンプに未来はあるか」という問いかけにも、大きく「あります」といえます。キャンプ場には夢があります。夢のあるところには未来があります。

『オートキャンプ』は「人は自然の中で生かされている」「自然と共に生きている」ということを何の気負いも無く知ることのできるレジャーではないでしょうか。

キャンプ場の社会的な役割をもっと多くの人に知っていただき、気軽にキャンプ場に足を運んでいただく工夫を考えなくてはと思います。

## 鷹野 好男

現代社会に於いてオートキャンプとはいったいどのような視点であるのであろうか考えてみたい。ゴールデンウィークや夏休みに予約が集中する事から見ると、レジャー産業としての位置付けとも言えるが、土日や休日を使ってのリフレッシュする活動と捉えると余暇活動の一貫とも言える。現代社会に於いてのオートキャンプとは「気軽に自然や野外活動の体感ができるきっかけの場」として位置付けられるのではないであろうか。

現代のオートキャンプにおいて、何を求められているのであるか。いちキャンパーとして、いちオートキャンプ場の運営管理者として考えてみたいと思います。

### 1. オートキャンプを構築しているのはなにか。

- ・オートキャンプという文化
- ・オートキャンプというスタイル
- ・オートキャンプという楽しみ方
- ・オートキャンプに必要な物
- ・オートキャンプをする場所

### 2. オートキャンプ場の提供するものの変化。

- ・サイト、箱物、場所だけの提供から
- ・雰囲気、時間、空間、人、知識、安心感
- ・イベント、プログラム、アクティビティ

### 3. オートキャンプ場での過ごし方の変化

- ・のんびりと過ごす
- ・観光の拠点、周辺施設を利用する
- ・イベントに参加する
- ・場内のアクティビティで楽しみ

### 青川峡キャンピングパークの基本コンセプト

- ・子供連れやビギナーが安心してアウトドア体験を楽しめるきっかけの場
- ・イベントやプログラムは地の物にこだわって青川峡でやる意味のあるものを
- ・イベントで集客はしない。あくまでお客様への感謝の気持ち「ファン感謝デー」
- ・ゆったりとした高級感と日常では味わえない異空間の演出
- ・スタッフは、ゲストを楽しめる気持ちにさせるキャストであること

沖田 雅生

月刊ガルヴィは「クルマで出かけるアウトドアマガジン」をキャッチコピーとした、オートキャンプを主題にすえた雑誌です。読者対象は30代の小学生を子どもにもつ男性ですが、その男性の家族全員が楽しんで読んでもらえるような雑誌作りを心がけています。

自分が手がけるようになってから5年目を迎えますが、ここ2-3年、「子どもになにかを与えたい」という気持ちから、キャンプを始められる方、つまり自然体験をさせてあげたいという気持ちをもった方が増えてきているようです。

そのような弊誌の読者 (=キャンパー) 動向から、テーマに沿ってお話しさせていただければと思っております。

=====

## 第2回オートキャンプ・シンポジウム

21世紀におけるオートキャンプ場

—オートキャンプ・ルネッサンスはキャンプ場から—

### 実行委員会

委員長 明瀬 一裕 (JAC 常任理事)

委員 松永 正剛 (JAC 常任理事)

委員 師岡 文男 (JAC 理事)

=====

事務局

(社) 日本オート・キャンプ協会

〒160-0008 東京都新宿区三栄町12 清重ビル2階

TEL 03-3357-2851